活動場所	活　動　内　容
ボランティア室	各種衛生材料作成、郵便物宛名書き、人間ドック手帳の作成、コピー、事務など
外　　来	外来受付、病棟案内、受診、検査についての案内、自動計測器類の準備や世話
病　　棟	配膳、配茶の準備、患者搬送の介助の補助、沐浴の補助、ベッド周辺の整備、花の水替え、お散歩、子どもの遊び相手、オムツの計測など、ホスピス病棟では、お茶会の準備、買い物に加え、一般病棟と同様の活動を行なっている。
そ　の　他	図書整理、車椅子、ストレッチャーなどの定期点検と修理、花の植え替え、草取り、芝刈りなど。

コーディネーター導入の経緯

淀川キリスト教病院にボランティア・コーディネーターが導入されたのは、ボランティア活動開始から5年が経過した1968年である。広瀬夫佐子医師を中心に、メンバーで調整などを行なっていた。コーディネーターを導入したのは、淀川キリスト教病院が日本初であるといわれている。導入当時、ボランティアが関わる活動内容は、看護部門が多いこと、他部門からのボランティアの要請についても看護部は理解しやすい立場にあることなどが理由で、看護部が兼任することとなった。また、ボランティア委員会当初からそのメンバーでもある、看護部事務職員、代表も共にコーディネーターとして活動している。

2003年現在のコーディネーターは、同年4月に就任した看護部主任課長と、1988年から兼務している看護部事務職員、1999年に就任したグループ会長が、それぞれの職務と兼任でコーディネーターとしてボランティア活動の支援をしている。

コーディネーターの活動内容

1．受け入れと登録

ボランティアの募集は院内にパンフレットを設置し、病院ホームページに掲載しているほか、口コミなどで申し込みがある。申し込みの受付窓口は看護部事務室であるため、主に職員のコーディネーターが受ける。面接は、希望者のニーズを聞くと共に、現在の活動内容や受け入れ態勢などを説明し、希望者のニーズを聞き、その後、登録となる。この役割は病院職員のコーディネーターが行っているが、土曜日など職員のいない場合はボランティアグループ会長が行う。2003年10月より募集説明会を開催し、今後は年間２～３回説明会を実施する予定。

2．オリエンテーション

新規ボランティアの活動初日に、活動方針をはじめ活動に関する諸注意などを説明し、その後、その曜日のリーダーへ紹介する。

3．適正判断と配置

3ヶ月程度の研修後、病院のコーディネーターが、本人の希望、適性、全体の活動状況などを踏まえた上で活動場所を決定する。

4．日常の配慮と調整

普段の活動内容や、ボランティア間もしくはボランティア・職員間の調整、相談などは主に事務職のコーディネーターが受ける。早急に対応が求められる場合などについては、適宜、いずれかのコーディネーターが調整する。ボランティア活動全体については、毎週金曜日に3人のコーディネーターが話し合う機会を設けている。

5．活動内容の開発

職員からの要望や要請については、主に病院のコーディネーターが対応し、ボランティアからの提案については、曜日リーダーが取りまとめ、3人のコーディネーターのいずれかに伝える。それをもとに、ボランティア委員会で協議の上、活動が開始される。

6．記録を含む事務

グループ運営の事務はグループ会長と副会長が担っているため、コーディネートに関わる事務もグループ会長が担うことが多い。

淀川キリスト教病院ボランティア・コーディネーターの特徴

① 複数制コーディネーター

淀川キリスト教病院のコーディネーターは、1968年当初より複数でその役割を担っている。大人数が活動しているため、コーディネート内容は多岐に及ぶが、複数で担うことで、それを可能にしている。更に、常勤職員のコーディネーターがボランティアの活動場所にいることで、何かあった場合、すぐに対処できること、ボランティアに対する問い合わせなど対して、すぐに対応できる。また、1人が欠けても他の2人がコーディネートを続けられ、コーディネートの空白を生まずに継続的な支援を可能にしている。また、複数コーディネーターがいることで、新たにその役割を担うこととなったコーディネーターも、コーディネートを学ぶことができる。

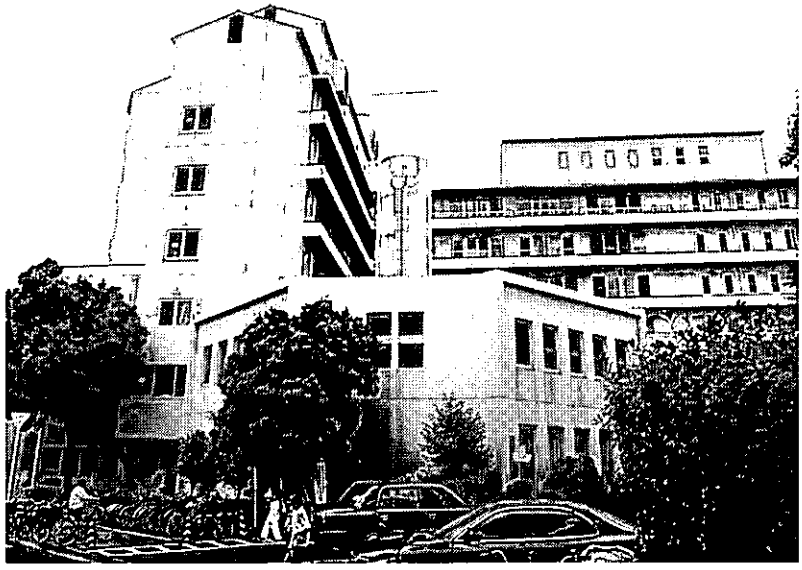
② 多面的コーディネーション

淀川キリスト教病院のコーディネーターは、看護職員、事務職員、ボランティアグループ代表の3人が兼任でボランティア・コーディネーターを担っている。また、コーディネーターだけではなく、曜日リーダーが各曜日の個別対応、曜日間の連絡などを担い、曜日全体のコーディネーター的役割を担い、コーディネーターは、活動開始までと、グループ全体についてのコーディネートを担当するなど、コーディネートの役割を分担している。立場の異なる多くの人々が、コーディネーションに携わり、多面的なコーディネーションを行なうことで、多岐に渡る活動展開を可能にしていると同時に、幅広いボランティア活動に対する意見をより多く取り入れることがで

きている。

③　病院全体にボランティア活動が浸透している

淀川キリスト教病院のボランティア活動は、開業医広瀬医師を始め、職員によって、積極的に導入された。職員のボランティアに対する信頼は厚く、グループは、外来受付案内やホスピス病棟での活動、衛生材料作りなど、病院には欠かせない活動を担っている。また、外来、病棟、庭園など患者の利用が多い場所で活動しているため、患者にも自然に受け入れられている。更に2003年４月からは、「全人医療の充実と、ボランティアとより良い関係を築くため」、ボランティア支援課を設置している。長年の活動とボランティア、職員の信頼により、病院全体に活動が浸透しており、コーディネートは、ボランティア・コーディネーターだけではなく、病院全体で支えられている。



淀川キリスト教病院

コーディネーターの
方々と、スタッフ、
ボランティアの方

ボランティアルームで
ボランティアの方々が
お昼ご飯

おむつを計測中の
ボランティア

2　聖路加国際病院

ボランティア活動の経緯

財団法人聖路加国際病院（以下、聖路加国際病院）は東京都中央区に位置し、病床数520床、診療科23科目の病院である。病院の歴史は、1902年、米国聖公会宣教師のルドルフ・トイスラー博士によって創設され、キリスト教精神の下に、患者中心の医療と看護を行なうことを創立以来の目標としている。ボランティア活動は、1945年から教会の奉仕活動として開始され不定期にボランティア活動を行なっていたが、1970年、当時、内科医長（現理事長）の日野原重明医師の発案で、アメリカで見たボランティア活動を、聖路加国際病院にも導入しようと数名のスタッフ、ボランティアで準備委員会を立ち上げ、同年12月、「聖路加国際病院ボランティアグループ」として、継続的な活動を開始した。聖路加国際病院では、他に2つのグループが活動しているが、今回は最も活動の歴史が長く、幅広い活動を展開している「聖路加国際病院ボランティアグループ」に焦点を当てる。

現在のボランティア活動

2003年9月現在、ボランティアは354人で活動しており、日本病院ボランティア協会加盟グループの中で最も大規模なグループである。ボランティアの年齢の幅は広く、学生から80代の方までが参加している。活動形態は月曜日から土曜日、9：00から21：00の間で、週に1回、3時間から6時間が原則である。一日のボランティア総数は50人から60人に及ぶ。多くの病院ボランティア活動は複数で活動するが、聖路加国際病院では、基本的に一人で活動し、それぞれ活動場所、曜日、時間が決まっている。

活動は、55部署の多岐にわたって展開している。外来では、外来患者の案内、事務補助、リハビリテーション補助、入院案内、患者の搬送、さわやか学習センター案内補助、ランゲージサービスなど、病棟では、花の手入れ、ベッドメーキング、配膳下膳、散歩の相手、食事介助、手術を受ける患者家族の対応、ICU、CCUでの補助など、その他、患者図書、ボランティア・ギフトショップの運営、庭園の手入れ、物品管理センターの補助、血圧ボランティア、音楽療法などの活動を行なっている。

コーディネーター導入の経緯

聖路加国際病院のボランティア・コーディネーターは活動当初から導入されていたわけではない。活動開始からコーディネーター制度が導入されるまでの間は、看護師長が「ボランティア担当婦長」を兼任し、コーディネーター的役割を担っていた。またボランティア代表を始め、数人のメンバーがコーディネートを行なっていた。1992年、新病院が完成し、それに伴いボランティア数も増加した結果、1993年、専任のコーディネーター制度を導入し、当時の夜勤師長が定年退職後、就任した。

現在のコーディネーター

2003年現在のボランティア・コーディネーターは、1953年から聖路加国際病院へ看護師として就職し、以来43年間聖路加国際病院に勤務している。1970年当時、看護婦長だった現コーディネーターも、ボランティア準備委員会に参加し、その創設期からボランティア活動を支えている。前コーディネーター退職後、理事長からの提案で、看護管理を退職した1996年より、嘱託職員として専任のボランティア・コーディネーターになった。

コーディネーターの活動内容

現在のコーディネーターは、月曜日から金曜日までの平日に、原則として7:30から18:00に活動している。ボランティア活動は土曜日も行なわれているが、土曜日には前コーディネーターがコーディネートを行なっているので、両者で金曜日の夜に打合せを行なう。そのため、特に金曜日は21時くらいまでいることもあり、実際の勤務時間はまちまちである。ここでコーディネーターの主な仕事内容紹介する。

1．ボランティア申し込み受付と説明会の企画実施

ボランティア活動希望者は往復はがきで申し込み、その受付・問い合わせ窓口をコーディネーターが行なっている。ボランティア説明会は、毎月1回、約2時間かけて、コーディネーターとボランティア代表で行なう。毎月の応募者数は30人から40人である。

2．ボランティア活動申し込み者の面接

上記のボランティア説明会で、コーディネーター、ボランティア代表の説明の後、質疑応答を受け、ボランティア希望者はその場で申し込み用紙に記入する。その内容を見ながら、両氏がその場で面接を1人10分程度行なう。

3．新規活動者の活動場所調整

面接後、新規活動予定者の活動場所について、病院の現場と、曜日、時間の調整を行ない決定する。その後、オリエンテーションの日程を決定し、決定事項と合わせて新規活動予定者に連絡する。

4．オリエンテーションの実施

新規活動予定者を召集し、3時間オリエンテーションを行なう。内容は、活動の心構え、ボランティアグループの規則、活動場所の見学、ボランティアルームや食堂の使い方などの説明を行う。

ボランティア活動を開始するのは、オリエンテーション終了後の次週からである。

5．活動継続の意思確認

ボランティアは3ヶ月の見習い期間を経て、改めて、コーディネーターと活動場所、時間などについて相談し、誓約書を書くと同時に病院職員と同じＩＤカードが貸与される。

6．ボランティアへの連絡

グループの昨年度の入会者数は約90名で、 退会者は約60名である。長期間、 活動を停止しているボランティアについては、 意思確認の連絡を取る。また、 活動を休むボランティアからの連絡を受けたり、各種委員会の連絡などを伝えたりする。

7．活動の援助

1日50名以上が活動するため、 欠員がでる場合があるが、 活動内容は多岐にわたっている上、1つの活動場所に1人が原則であるため、 場所によっては、 欠員が出るとリリーフを送ることを考える。毎朝、その日のメンバーの活動予定を把握した上で、活動人数が足りない場合は、コーディネーターが代役を務めることもある。

8．職員からの要望を受ける

随時、 職員からコーディネーターへボランティアについての要望があると、 その都度、 現場におもむき調整する。

9．各委員会へ出席

月に1回、日野原理事長へボランティア代表、ボランティアリーダー、コーディネーターの三者でボランティア活動全体について報告をする。また月一回の病院管理協議会に出席し、 病院の管理状況を把握、必要時ボランティアに関することを病院に報告する。

10．活動見学者・学生ボランティアの受け入れ

随時、見学者受け入れの準備と案内を行なっている他、春･夏休みの学生ボランティアの受け入れに関する業務も行なっている。

コーディネーターの特徴

① ボランティア代表との有機的な連携

聖路加国際病院のボランティア・コーディネーターは、 看護師になって以来、 現在に至るまで聖路加国際病院に勤務し、 医療知識はもちろん、 院内に精通し、 職員との信頼関係が築かれている。更に、 ボランティア活動創設期から職員として活動を支援してきた。現在は、 主にボランティアが活動を開始するまでの業務、 活動場所や人数の調整、 ボランティアの連絡を中心に活動をしている。

聖路加国際病院のボランティア代表は、 ボランティアグループ設立当時からグループを牽引してきた。現在は、 グループの運営や日々の活動やボランティアに目を配る他、 関東地区病院ボランティアの会、 日本病院ボランティア協会の理事もつとめ、 常に新しい病院ボランティア活動の動向を収集していると同時に、 日本全体のボランティア活動の普及に尽力している。両氏はコーディネートを分担する一方で、 ボランティアの説明会、 面接、 活動全体の方向性など

については共に協議し、取り組んでいる。聖路加国際病院のボランティア活動を共に形づくってきたボランティア・コーディネーターとボランティア代表は、有機的な連携のもと、コーディネートを行なっている。

② システム化されたコーディネート

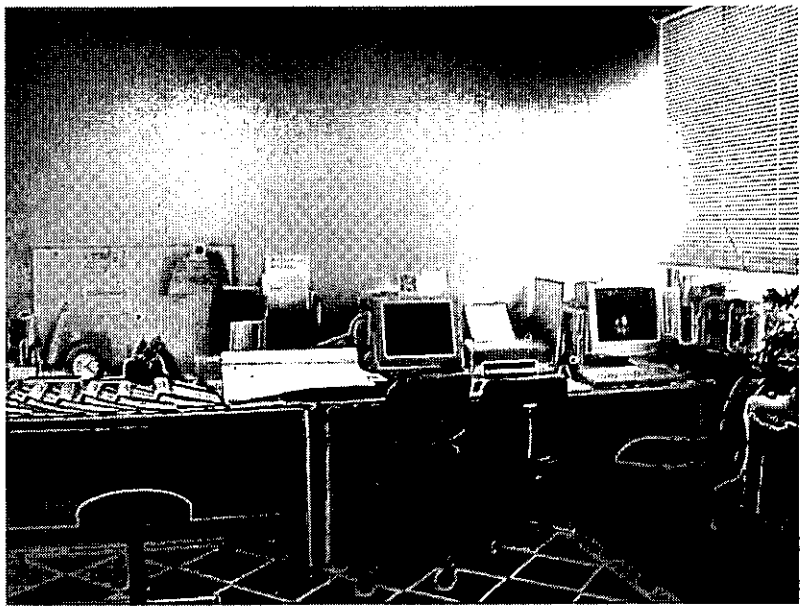
聖路加国際病院のボランティアグループは、約354名で、毎日、50名から60名ものボランティアが、55部署以上の多彩な活動を行なっている。更に毎月30名から40名のボランティア希望者の面接、見学者の対応、ボランティアに関わる諸会議の調整など多岐にわたるコーディネートが必要である。従って、聖路加国際病院のコーディネーションは、コーディネーターとボランティア代表が分担して行なっている。

ボランティアグループの運営は、運営委員が役割分担し自主的に行なっている。

③ 病院との信頼に支えられている

聖路加国際病院のボランティア活動導入の発端は現理事長の提案であった。現在も、多くの著書の中でも折に触れてボランティアについて述べ、各地でボランティアについての講演も行なうなど、病院ボランティア活動の普及に尽力している。現在、グループでは、ユニークな活動(ランゲージサービス、血圧ボランティア、ボランティアギフトショップの運営、手術を受ける患者家族の対応、手術を受ける親子の支援等)を数多く行なっている。また、聖路加国際病院のボランティアは、アメリカのボランティア活動を参考にし、原則的に、1つの活動場所につき1名が責任を持って活動している。

このような活動内容や活動方法は、理事長をはじめ、職員のボランティアに対する理解と信頼によって支えられている。コーディネーターは、ボランティアの特質と病院のシステムを十分理解した上で、コーディネートしていること、常にグループを牽引してきたグループ代表が、明確なビジョンのもとグループを支えていること、メンバーの長期間にわたる継続的な活動と努力によって築かれたものである。



ボランティアルーム

聖路加国際病院　病院ボランティア・コーディネーター

3　佐賀県立病院好生館

活動の経緯

佐賀県立病院好生館（以下好生館）は、1896年、 現在の好生館となり、 病床数541床、 診療科17科目の病院である。1998年2月、 自治体病院としては全国で２番目にあたる緩和ケア病棟を開設し、2002年、地域がん診療拠点病院の指定を受けた。

好生館におけるボランティア活動は、1992年、 当時の館長の強い熱意のもと、 当時の看護部長を初め、多くの職員が、ボランティア受け入れのための委員会発足に尽力し、また、活動を希望するボランティアの熱意によって、 外来から開始された。2003年現在、 その当時のグループは分化し、「佐賀県立病院好生館ボランティアグループ」と浄土真宗のメンバーで構成される「ビハーラ」が主に活動を行なっている。後者は、 小児病棟専門で活動を行なっている。今回は活動範囲がより広く、特色ある活動を展開している「佐賀県立病院好生館ボランティアグループ」に焦点を当てる。

現在のグループと活動

2003年9月現在、登録者40名程度で活動を行なっている。1日の活動人数は約4から5名で、活動形態は、月曜日から木曜日は9:00から12:00に外来受付で活動を行ない、金曜日の午前中は巡回図書を行なう。金曜日は午前に加え、 午後は希望者のみ緩和ケア病棟で活動を行なっている。緩和ケア病棟での活動者は約10名である。活動は、登録時に活動曜日、時間を決め、各曜日ごとに、メンバー全員で行なっている。各曜日には責任者がおり、調整を行なっているが、一日の活動人数は、４から5名であるため、曜日別のグループや活動内容別のグループもない。

主な活動は外来受付での活動、 巡回図書活動、 緩和ケア病棟での活動である。全てのボランティアは、 午前中の外来受付の活動を行ない、 緩和ケア病棟の活動は、 希望者が行なっている。新規ボランティアも、外来受付活動から始め、３ヶ月経過した時点で、希望者は、緩和ケア病棟での活動を開始する。外来受付での活動に全員参加するのは、「病院の全体がわかってくるし、 患者さんと最も自然な形で接することができる」という意図からである。外来受付での活動が始まった当初は、 受付案内中心の活動だったが、次第に病院や患者とボランティアの信頼関係が築かれ、現在は受付介助、車椅子介助、 院内案内、 診察室までの付き添いや、 話し相手、 散歩の同行など場面ごとに様々な活動を行なっている。当日の具体的な活動内容は、前日までに曜日リーダーが決めている。

緩和ケア病棟での活動は、1998年に開設された当初から行なわれている。活動内容は、 会話、 お茶のサービス、 定期的な催し、 傍らに居る、 などの活動を行なっている。活動の特徴は、 様々な宗教家の方が、 宗教活動から離れ、 院内ボランティアとして活動していることである。活動を始めるまでには、 その方向性と活動のあり方について何度も討議を重ね、 死や心のケアについての勉強会も回を重ねた。勉強会は、現在も副館長を始め病院職員も交え、定期的に行なわれている。

コーディネーター導入の経緯

佐賀県立病院好生館のボランティア・コーディネーターは、開始から3年後の1995年、メンバーの増加に伴い導入された。活動内容が外来中心であることから、導入以来、外来師長がコーディネーターを兼任している。

現在のボランティア・コーディネーター

2003年9月現在も、コーディネーターは、外来師長が兼任している。兼任であるため、コーディネートに費やせる時間が限られているので、病院とボランティアとの調整やボランティア問い合わせ窓口を中心に活動を行なっているが、ボランティア活動は外来が中心なので、ボランティアと1日1回は顔を合わせ、声をかける機会がある。それ以外のコーディネートは代表、グループメンバー、病院職員など多くの人によって担われている。

コーディネートの内容

1．院内ボランティアの募集

病院職員が作成したホームページで募集。その他は特に行なっていなかったが、今年はポスターも作り、問い合わせも増えた。

2．ボランティアの申し込み受付と面接

ボランティア窓口である外来師長が申し込みを受ける。その後、代表とボランティア2名が面接を行なう。その際、活動、規約などを説明し、希望者は登録する。

3．正式登録と意思確認

新規ボランティアは、3ヶ月間、体験ボランティアをした後、看護部長、ボランティアが面接を行なう。面接は、体験ボランティアの感想や、ボランティアについてどういったことを考えているか、今後続けていくかなどを聞く。

4．活動調整

日頃の活動については、連絡ノート等で曜日リーダーが連絡しあいながら、日頃のメンバー間の調整、活動内容の決定行なう。活動を休む時も曜日リーダーが受け、欠員が出て困る場合は、本人が他のメンバーに頼むか、曜日リーダーが代わりを探す。もしくは、メンバー間で連絡を取り、交替する。

5．研修会

ボランティアのみの研修会は特に設けていないが、院内の医療ボランティア講座を始めとする研修会などに各自参加してもらう。内容については事前にボランティアと病院で協議し決定する。案内の葉書やポスターなどはボランティアが作成する。

6．学生ボランティアの受け入れ

学生ボランティアの受け入れとその調整は外来師長が行なう。また、 大学生のボランティア実習を受け入れており、 短期間のボランティアも受け入れている。その他、 中高生も個別に申し込みがある。

7．ボランティアと病院の調整

ボランティアの意見や要望は、メンバーの各曜日担当者が、月に1回、ボランティア委員会でまとめ、 ボランティア懇談会の際に提示する。この懇談会は、 職員がボランティアと病院の円滑な関係を築くために設置し、月に1回行なわれている。懇談会のメンバーは、病院関係者（副館長、看護部長、副看護部長、緩和ケア、カウンセラー、MSW、緩和ケア師長、外来師長、管財係長、庶務課、医療情報課、その他）とボランティア全員が参加するが、病院、ボランティア双方の意見を交換する。ボランティアの意見や要望については、 病院側からどのように対処したか次回の懇談会で説明される。

コーディネートの特徴

① 目的を共有

佐賀県立病院好生館のボランティアと、職員が一つの目的を共有、結実したもののひとつに、緩和ケア病棟が挙げられる。緩和ケア病棟は1998年、自治体病院としては第2番目に設立された。その設立に向け、医療従事者を中心とした「佐賀緩和ケア研究会」、「佐賀県緩和ケア検討委員会」とボランティアの方々を中心とした「みしょうの会」、「佐賀がんを語る会」、「佐賀・生と死を考える会」、 その他多くの方々が、 立場の違いを越え、 自治体病院緩和ケア病棟開設第1号の富山県立中央病院への視察研修を始め、 様々な研究会や緩和ケア病棟設置運動を行い、 佐賀県に働きかけた結果、 緩和ケア病棟が誕生したのである。設立と同時に緩和ケア病棟では、 様々な宗教家の方が宗教活動から離れ、 院内ボランティアとして活動を始めた。宗教家の方々は、 職員も交え、ホスピスでボランティア活動を始める前に、「宗教家の会」を結成、肉体のケア、スピリチュアルケア、 精神のケアについて考える勉強会を定期的に行い、 活動の方向性を決めていった。また、現在も、定期的に「心のケア」の勉強会を行っている。このような勉強会には、副館長を始め、病院のスタッフも参加し、意見を交換し活動を発展させている。

② 病院とボランティアの協働

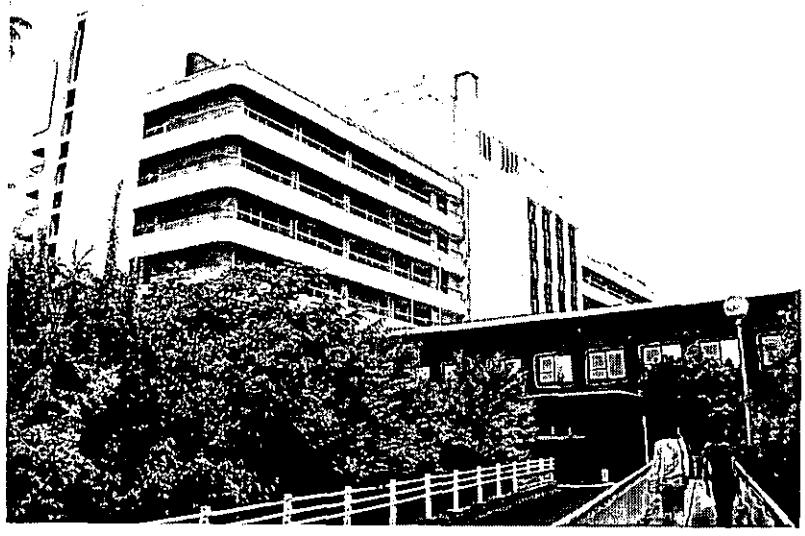
病院とボランティアの協働は、 緩和ケアだけに見られるものではない。佐賀県立病院好生館では「ボランティア懇談会」が月1回開かれており、 多くの職員とボランティアが集う。この会も病院スタッフが、ボランティアと円滑な関係を築き、活動を発展させていくために設置した。その結果、「〔この懇談会への参加によって〕ボランティアの活動についてあまり知らなかった

病院スタッフにもボランティア活動が広く知られることとなり、今では院内ボランティアの重要性が認知されるようになった」と副館長は語る。

「現在、グループメンバーが増えないことがグループの悩み」とリーダーは述べたが、それを解消すべく、本年度は、ボランティア募集のポスターを職員が作製した。そのきっかけも「赴任後、折に触れてボランティア懇談会への参加を副館長から誘われ、参加するようになった。その結果、ボランティア広報を担当するようになった」からだという。一方、ボランティアも、定期的に開催される様々な院内院外研修会に積極的に参加し、ボランティア同士で勉強会も開き、職員も度々参加している。懇談会や勉強会など職員とボランティアがコミュニケーションをとる機会が多いことが、活動だけではなく、コーディネートも協働することを可能にしている。また、一連の機会の設定、調整は兼任コーディネーターである外来師長が行なっていることから、コーディネートの基礎部分を本グループのコーディネーターは担っている。

③ 皆で担うコーディネート

兼任コーディネーターの外来師長は、病院とボランティアとの日程調整や、院内ボランティア活動についての問い合わせなどを中心にコーディネートしている。一方、各曜日の調整や、活動内容の検討、広報活動など、その他のコーディネート業務は、代表や曜日担当者など、特定の人物が役割分担しているのではなく、適宜、メンバーや職員によってコーディネートされている。これは、グループの規模が比較的小さい、活動場所が限られていることに加え、活動日のボランティアが全員一緒に活動するため、複雑なコーディネートを必要としないからといった要因が考えられる。しかし、それ以上に、一つの目標に向かって、職員、ボランティア共に活動をつくりあげ、それぞれが積極的にボランティア活動に関わりながら、日常的に多くのコミュニケーションをとりつつ、協働する活動スタイルを生んだ。その結果、コーディネートも特定の人物に任せてしまうことなく、皆で担うスタイルとなっている。職員とボランティアの密なコミュニケーションによって、ボランティア活動も、ボランティア・コーディネートも、全体で支えていることが佐賀県立病院好生館の最大の特徴である。



佐賀県立病院好生館

ボランティアの方と
ボランティア・コーディ
ネーターの外来看護師長

ボランティアについて
語る副館長

緩和ケア病棟で活動中の
ボランティアの方

4　日の出ヶ丘病院

活動の経緯

医療法人社団崎陽会日の出ヶ丘病院（以下、 日の出ヶ丘病院）は、1968年に開院した、 療養型病床群を基盤とした高齢者医療に取り組む病院で、病床数263床、診療科目3科目の病院である。2000年にはホスピス病棟を新設した。2001年3月、 本格的にボランティア活動は開始された。ボランティア活動は大きく病棟ボランティアと行事ボランティアに分かれる。行事ボランティアはコンサートボランティアが主で約9グループ、30名が活動しているが、 今回は、 病棟で継続的に活動を行なっているボランティアに焦点をあてる。

2000年、 ホスピス病棟開設にあたり、 企画広報室で、 職員とボランティアが共に学びあう「ターミナル講座」を行ない、 その講座の参加者がボランティア登録をし、 約30人で2001年3月活動を開始した。当初はコーディネーターが不在であったが、同年4月、コーディネーターが着任し、順調に活動が行なわれている。グループ名は「病院の中が暖かい雰囲気に包まれることを願って」、「おひさま」と名付けられた。

現在のグループと活動

2003年9月現在、グループは、約40人のメンバーで活動している。活動は、ホスピス病棟を中心に、病院全般で行なっている。月曜日から土曜日の10：00から16：00が原則で、患者には一人で接することを基本にしているが、 新規のボランティアの場合は他のボランティアと一緒に行動する場合もある。活動内容は、患者や患者家族の話し相手、傾聴、お茶のサービス、ハンドヒーリング、さする、ベッドサイドの花の世話や植木の手入れ、園芸療法の手伝い、行事の手伝い、車椅子等での移動、整備、縫製など様々である。これらの活動は、担当ボランティアが決まっているわけではなく、活動当日、コーディネーターと調整し自主的に行なう。また、 直接患者を支援する活動ではなく、 見学者へのボランティア活動の説明も行なっている。その他、 運営資金作りとして、 メンバーで小物を作成、販売や、お互いの活動報告と活動紹介のため、ボランティア便り「おひさま」も作成している。この便りは年２回、2月、8月に発行され、2003年8月で3号を迎えた。

コーディネーター導入の経緯

2003年9月現在のコーディネーターは、 日の出ヶ丘病院初のボランティア・コーディネーターである。1998年、 日の出ヶ丘病院でホスピス病棟設置の動きがあり、2000年11月28日にホスピス病棟が設置されたが、 それに伴う準備として、 企画広報室で「ターミナル講座」が行なわれた。その講座の講師として、 コーディネーターの著書『ホスピス病棟に生きる』を読んだ職員から講演を依頼されたことが、日の出ヶ丘病院とコーディネーターの出会いであった。その際、病院の雰囲気が良く、

医師の立場ではない女性の理事長の理念に共感し、「ボランティア・コーディネーターとして当病院で働きたい」と相談し、2001年4月より正式に日の出ヶ丘病院のボランティア・コーディネーターを務めることとなった。

現在のコーディネーター

2001年4月、コーディネーター就任当初から専任常勤コーディネーターとして、組織的には事務・管理に所属している。活動を始めた当初は、ホスピス病棟におけるボランティアのコーディネーターであったが、活動を始めて6ヶ月ほど経ってから、病院全体のボランティア・コーディネーターになり、ボランティア室を拠点に活動している。

コーディネーターの活動内容

日の出ヶ丘病院のコーディネーターは、月曜日から金曜日、9：00から17：00の勤務となっているが、仕事が多いこともあり、朝8時過ぎには病院へ来て事務作業を行なっていることが多い。また、終業は夜になることもしばしばである。コーディネーターの活動は非常に多岐にわたっている。以下、本人が作成した「ボランティア・コーディネーターの役割と仕事」とインタビューをもとに主な活動を紹介する。

1．ボランティアの募集

ボランティア募集は随時行なっており、方法としては公募（日の出町、あきる野市のボランティアセンターに募集パンフレットを配布、病院のホームページ、ボランティア便り、地方新聞掲載など）と口コミで応募がある。本年度の新規のボランティア応募者は13名程度。辞める人は1から2人。

2．ボランティアの受け入れ

応募者に対してはコーディネーターが面談を約2時間程度行ない、登録する。最初は活動経験のあるボランティアと共に活動を行なう。3ヶ月後にボランティア・コーディネーターが再面談を行ない、心構え等を話すと共に活動の意思確認を行なう。

3．教育

登録時にボランティア教育を行う他、登録後、3ヶ月をめどに心構え等を話す。

4．継続教育

ボランティア研修会－月に1回、ボランティア研修会を行なっている。研修会では、連絡事項などを伝える、傾聴、守秘義務、感染の防止、その他、テーマを定め内容を深めている。ボランティア全員が顔をあわせるのはこの時である。また、この研修会には職員の出席も要請している。その他、それぞれの活動日に必要に応じて面談も行なっている。

5．ボランティア活動の支援

日誌へのコメント記入、園芸作業などボランティアとの協働、ボランティア活動の記録、ボランティアグループ運営に関わる業務、ボランティアの健康管理など。

6．職員とボランティア、活動の調整

毎朝、ホスピス病棟のミーティングに参加し、活動に必要な情報を得ると同時に、当日のボランティア活動者を報告する。病棟行事について、その内容、ボランティアが担う部分などを職員と打合せる。また、ボランティア活動を通じてボランティアが得た情報を、ミーティングの際、報告し、情報を共有する。その他、院内諸会議へ出席し、ボランティアに関わる説明を行なう。

7．職員へのボランティア啓発

毎年4月、新入職員にボランティア導入の意義とボランティアへの接し方を説明する。また、ボランティア受け入れ懇談会を年1回、計画・実施している。メンバーはボランティア全員と各職場長である。懇談会では、職員とボランティアが一同に集い互いの親睦と意見交換を行なう。

8．患者のボランティアに対する認知を促す

ホスピス病棟に関して、入院時に、ボランティア活動の案内を渡し、ボランティア活動の理解と利用を促す。毎朝、病棟を訪問し、患者の状況を把握、活動予定のボランティアに伝える患者一覧表を修正する。家族会へ参加する。患者（家族）がボランティアルームへ訪問しやすいようボランティア室を開放し、対応する。

9．実習・見学の受け入れ

医療相談窓口で、ボランティアに関する見学者を随時受け入れ、その案内や説明をする。また社会福祉協議会と相談して体験ボランティアを受け入れている。

10．看護学生の実習

看護部と連携し、他病院の看護学生のホスピスケア見学実習を受け入れ、ボランティアについての説明を行なう。

11．行事ボランティアとの交渉・依頼状、礼状の発送

コーディネーターの特徴

① 契機としての入院経験

日の出ヶ丘病院のコーディネーターは、1984年、入院の体験をし、その体験をもとに1987年、患者会「新樹の会」を結成、代表を務めた。その活動を通じて、ホスピス病棟の必要性を感じ、「医療を通して患者さんをみるというよりも、患者さんの立場になったケアをするにはボランティアの存在が欠かせない」と思うようになり、1997年『ホスピス病棟に生きる』をまとめた。その間、様々な病院でボランティアに出会い、「ボランティアさんはどこの病院の中にも必要だ」と思う

ようになった。「その頃、勤務していた病院でもボランティア活動は行なわれていたが、その活動は洗濯などで、ボランティアの存在も知られておらず、またボランティアに対する教育も行なわれていない状態」で、ボランティアを支援する仕組みの必要性を感じていた。また、「日本病院ボランティア協会の賛助会員になり、協会から送られてくる資料を見る機会が増え、きちんとしたコーディネーターのセクションを作らないといけない」と考えるようになった。2000年、日の出ヶ丘病院の「ターミナル講座」の講師を務めたことがきっかけで、コーディネーターを担うこととなった。

② ボランティアの教育と個人の成長を重視

日の出ヶ丘病院のコーディネーターは、長年教鞭をとっていた経験を生かし、教育を重視したコーディネートを行なっている。「コーディネートは学校教育と同じイメージがあり、『人を育てていく』というのに必要な方法を自分なりに応用した」とし、コーディネーターの資質について「コーディネーターになるには、ある程度教育的な要素が重要。また、人を育てるような、後から見守るような、黒子のようなことができる資質も重要だと思う。」と述べている。また、(コーディネーターの最も重要な仕事は)「教育だと思う。ボランティアが成長し、家族、患者さんのためになるような場を作ることが大切。そのためには職員への教育も必要」と述べ、「職員に対する教育」も重視している。コーディネーターは教育により、個人が成長することも重視している。教育を重視したコーディネートは、活動内容や方法からもうかがえる。例えば、活動は場所も内容も固定されていない。ボランティアは毎回、活動開始前に、コーディネーターと30分ほど様々な話をし、それぞれの「気付き」で活動を行なっている。この「気付き」とは、会話の中から、ボランティア自身が、活動のヒントや方向性を発見することである。また、新規ボランティアはホスピス病棟から活動を始める。更に、コーディネーターは「全ての活動は傾聴に至るまでの手段」と捉え、病院ボランティア活動の本質がホスピス病棟にあり、傾聴することが重要である、という考えを実践している。コーディネーターは個人の成長につながるように、活動後は共に振り返り、定期的な研修会も行なっている。

③ ボランティア・コーディーターネットワークの構築を目指している

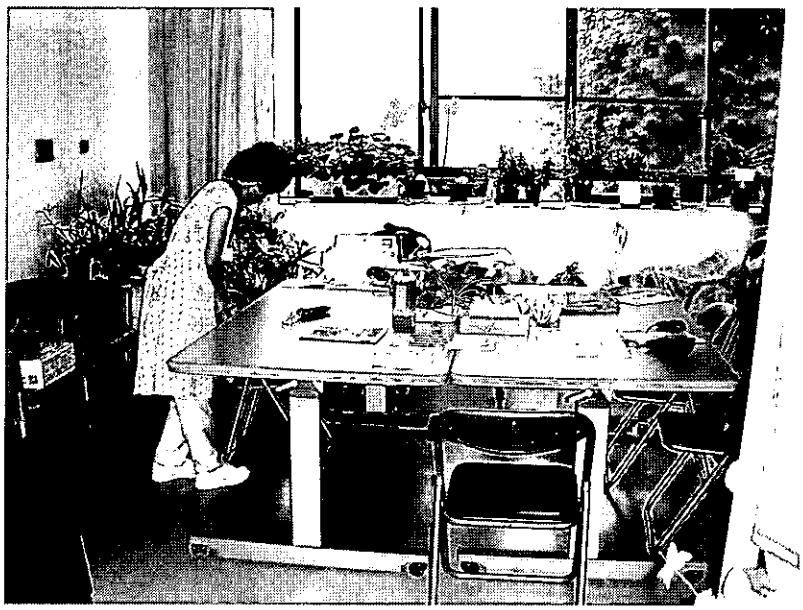
現在、日の出ヶ丘病院のコーディネーターは、社会福祉協議会の協力のもと、日の出町の様々な施設コーディネーターとのネットワーク構築に取り組んでいる。地域のコーディネーターが、共通のボランティア観、コーディネーター観を始め、様々な情報を共有することで、ボランティア、患者、施設にとって、より意義ある活動になるようなネットワークづくりを目指しているのである。「『ボランティアを導入すると職員の仕事が無くなるのでは』と危惧するコーディネーターもいるのよ」とコーディネーターがボランティアを職員の代替と捉えていると指摘し、ボランティア育成にはまず、コーディネーターの育成が必要であることを語った。また、今後は、日の出ヶ丘病院でコーディネーター研修も行ないたいと考えている。更に、「日の出町のネット

ワークが充実したら、 周辺の町との協働、 ゆくゆくは関東地区の様々な病院ボランティアの会でもボランティア・コーディネーターのネットワークを作って行きたい」とコーディネーターは語る。

日の出ヶ丘病院

ボランティアの方と朝の打合せ中のボランティア・コーディネーター

製作した足カバーを試着、検討中のボランティアとコーディネーター



広くて明るいボランティアルーム